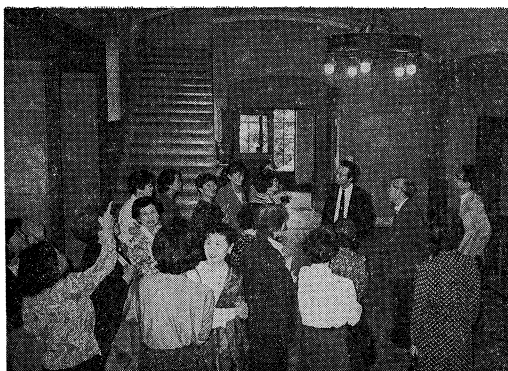


「第一回岡山田キャンパス見学会」報告

一九九二年十月二十日爽やかな秋の午後、生涯教育委員会主催による「第一回岡山田キャンパス見学会」が開催された。昨年度まで同委員会の委員長でいらした松田高志教授のもとで発案されたこの催しは、今回が初めての試みという事で、参加者は大学教員、同窓会員に限られていたが、当日会場となった文学館1-28号教室には大学教員が七名、同窓会からは溝口百合合同窓会理事をはじめ一四名、計二一名が集まった。

午後一時三十分、今年度の委員長北島 徹教授の挨拶で当見学会は始まった。この見学会の目的はそもそも、学外の人々にもこの美しい神戸女学院をよく知ってもらおうという所にあるが、今回は手はじめとして身近な方々にそれを味わっていただくことにしたということであった。北島先生は授業の都合で残念ながらすぐに中座され、マイクが史料室担当の若山晴子助手に渡された。実地見学を前に、まず「神戸女学院史の中の岡山田キャンパス」についての紹介(若山助手)と、このキャンパスを形成している「ヴォーリス建築」についての解説(浜下昌宏教授)を聴く。

当日配布の資料を見ると、岡山田移転の際の様子は、当時の『めぐみ』や英字新聞「ジャパン・アドヴァタイザー」に大々的にとり上げられており、『建築記念帖』はもとより、その後の学院史、そして『学院史料』第二号の、渡辺久雄元史料室担当顧問の論考及び史料によっても明らかにされるが、ここで注目すべきことは、この「壮麗の」校舎を実現させた人々(学院教職員、同窓生、神戸カレッジ・コーポレーション、当事者たちの呼びかけにこたえて募金に応じてくれた日米両国の多数の人々、そして設計者ウィリアム M・ヴォーリス博士、建築会社竹中工務店の当主竹中藤右衛門氏、等々)の熱意、そして尽力である。



キャンパス巡りの一コマ(講堂のロビーにて)

岡田山キャンパスの設計者であるヴォーリズ博士は、一八八〇年米国カンザス州のオランダ系プロテスタントの信仰篤い家庭に生まれ、一九〇五年に來日、近江キリスト教伝道団を中核として多方面に活動された。ヴォーリズ設計事務所もその活動の場の一つであった。宣教師であった博士は、建築をも、「神の栄光の反映であり、そこに入る人の精神の昂揚を助けるものでなければならぬ」と考えていた。そして満喜子夫人が神戸女学院音楽部の卒業生であったという事情も合わせ、岡田山キャンパス設計に当たっては特に心を傾けて仕事をされたようである。また建築を請負った竹中氏は、このような博士の設計理念を限られた予算で具現化するために、土地入手の時点から援助と尽力を惜しまなかった。そして何よりも当時の神戸女学院関係者の計り知れない努力がキャンパス移転を強力に推進していったわけであるが、これらの事情は、先の配布資料にあげた史料類に詳しく述べられている。

続いてスライドを見ながらのキャンパス内の建物の説明があり、神戸山本通の敷地から移築されたもの、新しく造られたもの、その後手を加えられたもの、美しい意匠や工夫のいくつかを目で確めたが、中には珍しい日本建築風の図書館構想図も含まれ、会場から笑いが洩れた。

岡田山に移ってすでに六〇年が過ぎ、当然のことに建物は古びてきた。しかし古びてなおこの建物は、そこに凝らされた意匠工夫の美事さと共に、それにかけられた先人たちの心意気の故に、神戸女学院の貴重な記念碑として守り伝えられる価値を持っている——というのがこの項の結論のようであった。

引き続き浜下先生による美術史・美学的見地からの解説に移った。先生は神戸女学院に赴任されヴォーリズ建築に驚嘆したと話を始められた。ヴォーリズ博士の建築作品は、近江ミッシヨンの教会・宣教師住宅、商業建築、ミッシヨンスクール建築、住宅建築、教会建築の五種類に分類されるが、そのうち岡田山キャンパスには後者三

つの要素が見られ、その様式はスパニッシュスタイルであると述べられた。スパニッシュスタイルの特徴は、全体的に比較的なだらかな線、屋根に使われるスペイン瓦、パティオと呼ばれる中庭、アーチ型の窓、白い壁、タイルの使用等に見られるが、岡田山という立地条件から神戸女学院のキャンパスには多くのオリジナリティが加えられているとのことである。またヴォーリズ博士は岡田山キャンパスを設計するに当たり、瀬戸内海を地中海と見做し、海を見渡す高台の好位置に学問の中心となる「図書館」を据えたのではないかという仮説も披露された。

また浜下先生は、ヴォーリズ博士は神戸女学院と同じく「愛神愛隣」を建築モットーとし、プロテスタント特有の質素、質実、合理性、奉仕に富んだ精神を持って、その人の立場に立った設計をされている―と述べ、これは、現代の奇を衒ったモダニズム建築には全く見られないものであり、歴史を通して永遠に変わらないものを常に自覚して仕事に当たられたことのあらわれであると評価され、その具体例としてスティーム暖房、下水道設備、建物の壁や床の仕上げ、廊下の広さ、寮の採光等をあげられ、建学理念と実際の生活の場としての機能性のバランスの重視を強調された。

最後に同じくスライドを使って岡田山キャンパス内の建物の建築上の特徴の説明や美観の紹介があった。

一時間半にわたる両先生の解説の後、長年校舎保全の実務に当たってこられた施設課の藤原秀司課長補佐に加わっていただき、文学館の教室、廊下から実地見学が始まった。

藤原氏の説明によると、配電線や暖房設備の配管等を壁に埋め込むことによって美観を保ち、壁は音を遮るのに十二分の厚さを持つているということである。続いて講堂、総務館、中庭と廻ったが、普段何気なく通り過している廊下や階段の美しさと使い易さを考慮した設計から、外壁に見られるちよつとしたアクセントとなるデザインに至るまで、ヴォーリズ博士の行き届いた配慮を実感して、見学者の間には感嘆の溜息があとを断たなかった。

最後に訪れた図書館では、建物の設計はもとより机、椅子までもが、使い勝手、美を意識してデザインされ、しかも手作りであるとの浜下先生の説明に、また驚嘆を禁じ得なかった。時間と足まわりの都合上、音楽館―正門、中高部―谷門、寄宿舎方面のルートは割愛されたが、一まず好評のうちに、午後四時見学会を終えた。

(西尾 光子)